高遠城跡（伊那市）

築城年代：不詳 、築城者：高遠氏

大手坂→大手門跡石垣→旧大手門→藩校進徳館→北ゲート→二ノ丸門跡→高遠閣→天下第一桜の碑→桜雲橋→問屋門→本丸→高遠公園碑→新城・藤原神社→太鼓櫓→南曲輪→白兎橋→法幢院曲輪→本丸と二ノ丸との間にある内堀の堀底道の順に見てみよう

縄張図/伊那市立高遠町歴史博物館パンフレットより

ゲート
W. C
二ノ丸
門跡
中堀
かんすけぐるわ
勘助曲輪
新城
藤原神社
高遠公園碑
土塁
内堀
高遠閣
天下第一桜の碑
ほんまる
本丸
桜雲橋
問屋門
にのまる
二ノ丸
土塁
外堀
ささぐるわ
笹曲輪
池
土塁
太鼓櫓
土塁
搦手門跡
三峰川
みなみぐるわ
南曲輪
靖国招魂碑
無字の碑
W. C
外堀
出張橋
馬場先門跡
ほうどういんぐるわ
法幢院曲輪
南ゲート
外堀
W. C

左正面が大手坂/ここから大手門跡へと進む

そこから振り返って高遠町を見たところ/城下町として機能したのであろう

大手坂を登って来たところ

大手坂に沿って石垣が残っていると云う

大手坂石垣（史跡高遠城跡内）

指定　国指定史跡　昭和48年5月26日指定
所在地　伊那市高遠町東高遠
所有者　伊那市ほか

大手坂は高遠城登城のための道で、大手門（追手門）の西側に位置します。

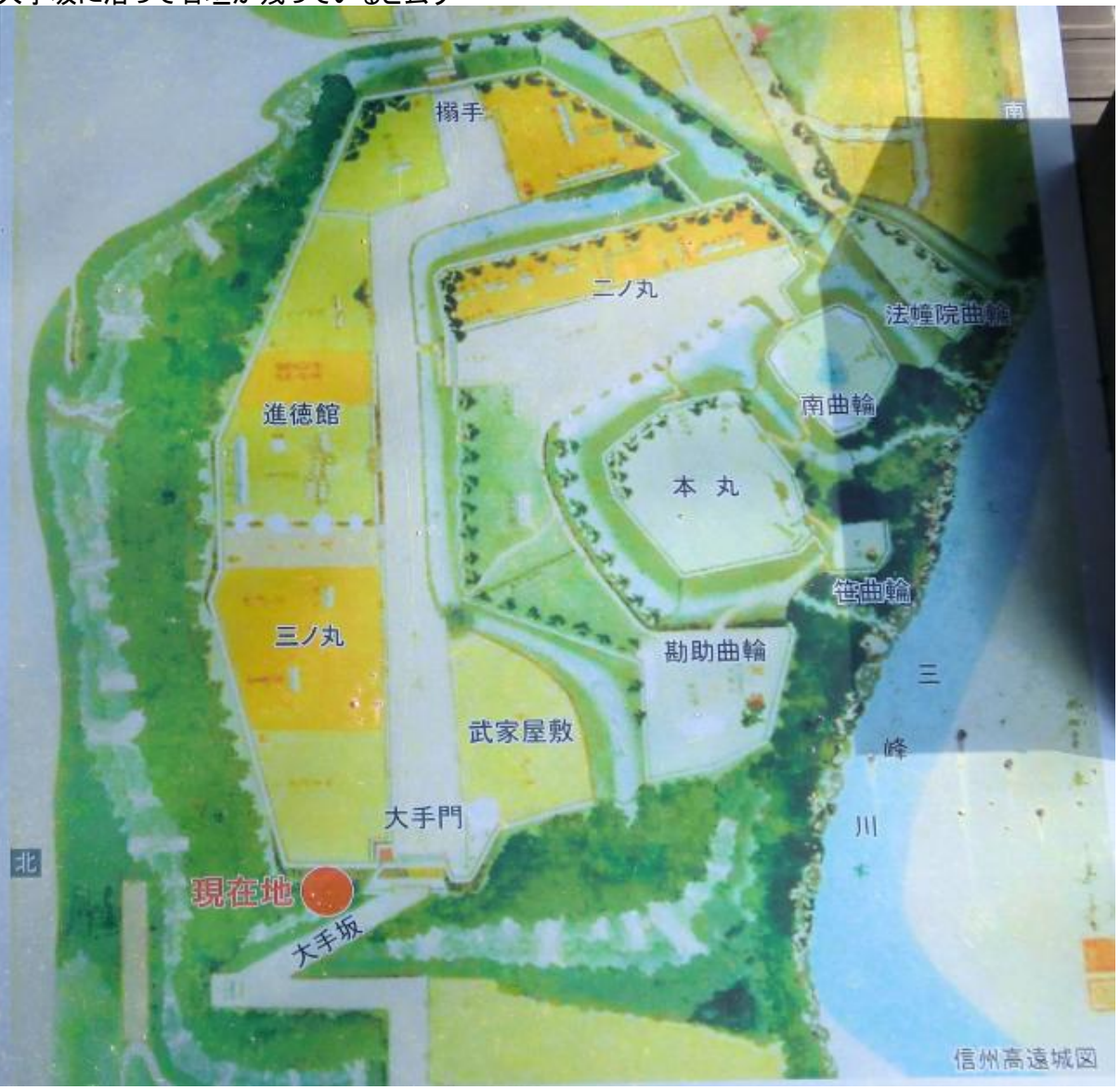
戦国時代、武田氏が当地を治めていた頃、大手口（正面入口）は城の東側にありました。当時、現在地周辺は城の搦手（裏口）にあたり、城の背後を守る断崖でした。

江戸時代に入り安定した時代になると、城の西側段丘下に新たな城下町が建設され、大手口も城の西側へ移されました。これに伴い、城と城下を結ぶ大手坂も新たに整備されたと考えられます。

高遠城跡内に現存する石垣のうち、江戸時代まで遡るものは少なく、特にここの石垣は、絵図からも存在を確認することができる大変貴重なものです。

高遠絵図（江戸末期～明治初期）

高遠城郭之図（明治初期）



この辺りが大手門跡

大手門跡（おおてもんあと）

築城当初、表門である大手（おおて）は城の東に、裏門である搦手（からめて）は西に位置していた。

ここが大手に変わったのは、幕藩体制の基盤が揺るぎないものとなってきた江戸時代の初期と言われていて、正保（しょうほう）年間（一六四四～一六四八）に描かれた絵図では、城の西（現在地）に大手門が確認できる。

廃城後、この周辺の改変は著しく、往時の様子を窺（うかが）い知ることができないが、道路南東（右手奥）にある突き出した大きな石垣は、大手枡形（ますがた）の一部と思われ、当時の石造構築物の姿を留める貴重なものである。

正面は残存する大手桝形の石垣の一部

アップで見たところ

これは伝、高遠城大手門

伝、高遠城大手門（おおてもん）

この門は高遠高等学校が、この地にあった昭和五十九年（一九八四）まで正門として使用されていた。

明治五年（一八七二）新政府から城郭の取り壊しを命ぜられ、城の建造物や樹木は、競売に付されすべて取り払われた。

当時、城内には大手、二ノ丸、本丸、搦手（からめて）の四つの櫓門（やぐらもん）（間口五～六間、奥行二間の二層門）があったが、いずれも競売されて民家や寺院の門として払い下げられていった。この門は、そのうちの一つで大手門といわれているが、その形は切り詰められ当時の姿ではない。

昭和二十九年（一九五四）に高遠高等学校の正門として、伊那市富県（とみがた）の那須退蔵氏(亡)より寄贈を受け移築されたものである。

ここは三ノ丸のエリア/右手前方に伝、高遠城大手門が見える

これは三ノ丸に残る藩校進徳館の表門

標柱に「史跡　進徳館」とある

三ノ丸には藩主の子供が暮らした御殿や家老などの屋敷があったが、江戸時代末には空屋敷を利用して藩校進徳館が開かれた

国指定史跡

進徳館

（指定　昭和四十八年五月二十六日）

進徳館は高遠藩主内藤頼直が前藩主頼寧の意志を受け継ぎ、藩士中村元起の熱望により大学頭林復斎の助言を得て万延元年（一八六〇年）三月郭内三之丸に内藤蔵人の屋敷を文武場にあてて創設した藩学校である。

頼直が「興国の基礎は藩士を養成するにあり、藩士を養成するには文武を奨励するより先なるはなし。」と藩学校設立の趣意を説き、老職岡野小平治を文武総裁に任じ、中村元起、海野幸成を文学師範に命じて 和学、漢学その他筆学、兵学、弓術、馬術、槍術、剣術、砲術、柔術、後に洋学を講ぜしめた。優秀なる教授を網羅して、進歩的な教育が行われ、多くの偉材を育成し、特に教育界に中堅人物を輩出した。

旧進徳館の主要建物は八棟造り、平家茅葺きで現存するものは前通りの東西二棟と玄関及び表門で、その他は明治四年（一八七一年）閉鎖後取り払われた。前通り西棟は聖廟、総裁、学監教授方師範詰所、教場、生徒控所等を含んだ講堂で東棟は生徒控所であった。

進徳館は松代文武学校と共に信濃藩学中その遺構を最もよく存するもので貴重な史跡である。

玄関

城内に唯一残された江戸時代の建物

ここから高遠城址公園となっている高遠城跡に入る

大手道と二ノ丸の間にある中堀を渡る/この先が二ノ丸門跡

右手の中堀を見たところ

中堀を渡ると二ノ丸のエリア

左手の建物は高遠閣/登録有形文化財

高遠閣

（登録有形文化財）

高遠閣は昭和八年当時、高遠城址公園内に会館を建て、町民の集会や観光客の便に供することが町の発展のため有意義ではないかという愛町の思いから、東京高遠会の有志の発案により、日本画家池上秀畝氏、出版業矢島一三氏、鉱山業廣瀬省三郎氏、弁護士小松傳一郎氏の四名の寄附により、当時の町長廣瀬常雄氏の協力のもと棟梁竹内三郎氏を中心に建築が進められ、昭和十一年十二月六日に完成しました。

この建物は間口十四間（25.4m）、奥行九間（16.4m）、峯高十間（18.2m）、木造総二階建、入母屋造、鉄板葺（建築当時はこけら葺）の大規模建物で、大正・昭和初期の希有の建物として平成十四年八月二十一日に国の登録有形文化財として登録され、長野県天然記念物桜樹林の中に高くそびえる赤い屋根の偉容は、遠方からも眺められ史跡高遠城跡（昭和四十八年五月二十六日国指定）のシンボルとなっています。

平成十五・十六年の二ヵ年に渡り施設の保存及び有効活用を図るため、構造補強、バリアフリー等の工事を行い、平成十六年十月十一日に完成しました。

地域住民の各種活動の場として、史跡高遠城跡を訪れる観光客の皆さんの休憩所等として利用されています。

立派な唐破風

昭和初期の大規模和風建築としては稀有な建物である

変わった形の肘木

こんな塩梅

「指定史跡　高遠城跡」の石碑

さて、二ノ丸を本丸方向に進もう

右手に立つのは「天下第一桜」の碑

ここは二ノ丸と本丸との間にある内堀に架かる桜雲橋/前方に問屋門が見える

その内堀を見たところ

問屋門/ここが本丸への虎口

問屋門（とんやもん）

この門は、高遠城下、本町の問屋役所（とんややくしょ）にあった問屋門（とんやもん）である。

江戸時代、主な街道には宿駅（しゅくえき）が定められ、問屋（とんや）と称する公用の荷物の継ぎ送り、また、旅人の宿泊、運輸を取り扱う町役人をおいていた。

高遠の問屋は、二人の名主（なぬし）との合議によって町政にも参与していた。

昭和二十年代、問屋役所建物取り壊しの際、他に売却されていたが、歴史ある門が高遠から失われることを惜しんだ町の有志が買い戻し、募金を集めて現在地に移築したものである。

現在では、手前の桜雲橋（おうんきょう）とともに、城跡には欠かすことができない景観シンボルとなっている。

前方が本丸のエリア/左手に説明坂が立っている

高遠城の戦い（古戦場跡）

天正十年（一五八二）二月、織田信長は、信玄亡き後の武田氏の混乱に乗じて、一気呵成の攻略に転じた。

伊那口からの嫡男信忠率いる五万の兵の進攻に、怖れをなした伊那谷の諸将は、城を捨て逃亡、あるいは降伏して道案内をするなど、織田軍は刃に血塗らずして高遠に迫った。

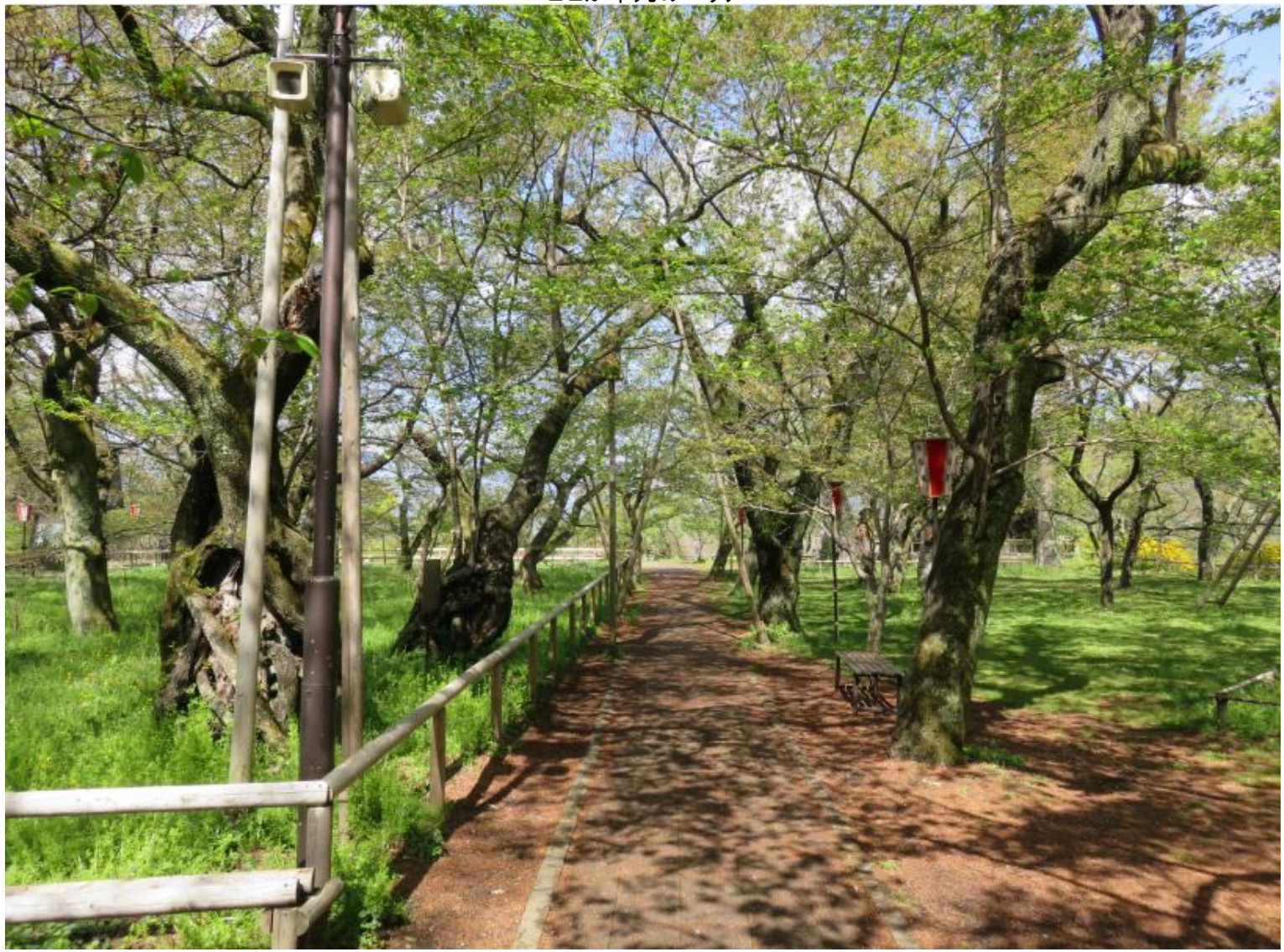
時の城主、仁科五郎盛信（信玄の五男）は、降伏を勧める僧の耳を切り落として追い返し、わずか三千の手兵をもって敢然とこの大軍を迎え撃った。古来「要害は必ず兵禍を被る」と言われるが、この城も盛信以下将兵決死の奮戦にもかかわらず、雲霞の如き大軍の前には如何ともし難く、三千の兵はことごとく城頭の花と散り果てた。城主盛信は腹をかき切り、自らの手で腸を壁に投げつけて果てたと古書は伝えている。

この後、武田勝頼は、諏訪上原城から新府に退き、天目山で自害した。高遠城の戦いは、かの強大を誇った武田氏の最後を飾る戦いの場となったのである。

振り返って虎口を見たところ/このマウンドは残存する土塁

その土塁をアップで見たところ

ここが本丸のエリア



本丸跡（ほんまるあと）

高遠城は巧みに天然の地形を利用し、本丸を段丘の突端に置き、東から北にかけて二ノ丸、さらに、その外側に三ノ丸を廻らした城郭三段の構えをもっていた。

天正十年（一五八二）城主仁科五郎盛信が織田軍に敗れ壮烈な戦死を遂げた後、高遠城の城主は保科氏、鳥居氏と替わり、元禄四年（一六九一）からは内藤氏が廃藩まで八代、百八十年間にわたって城主であった。江戸時代、本丸には城主の権威の象徴たる天守閣はなく、平屋造の御殿や櫓、土蔵などがあった。

本丸御殿は政庁であるとともに藩主住居も兼ねていたが、廃城時、城内の建物は取り壊され、今では明治八年（一八七五）頃に移植された桜の古木が毎年美しい花を咲かせ、幾多の武士が眠るこの地に散華となって降り注いでいる。

これは「高遠公園碑」/右手に説明坂が立っている

高遠公園碑（たかとおこうえんひ）

「高遠之城　拠信山東陬」（高遠の城は信山の東陬に拠り）で始まる白文、楷書の碑文は、東宮侍講、三島毅の名文で、地理的歴史的考察を踏まえ、公園地に決定されるまでの沿革が記されている。

碑文は明治の三筆と言われた書家、巌谷修（一六）の書で、その子、巌谷小波は日本のアンデルセンと称された明治の児童文学者である。

父子ともども高遠と縁が深く、鉾持桟道には小波の句碑が建てられている。

公園碑が建てられたのは明治十四年（一八八一）、台石には青銅板がはめられていて、それには、明治維新の際、高遠藩から戊辰戦争に出征した年月や方面、人名が刻字されていたが、戦時中に亡失している。

ここは新城神社と藤原神社

社殿

新城（盛信）神社・藤原神社の由来

天保二年（一八三一）七代藩主内藤頼寧は、家臣中村元恒の建議により、天正十年（一五八二）当城において織田の大軍を引き受け、壮烈な最期を遂げた武田信玄の五男、仁科五郎盛信の霊を五郎山より城内に迎え「新城神」と称して祀り崇拝した。

以前より城内には、先代内藤頼以が内藤家の祖神である藤原鎌足公を勧請した「藤原社」があったため、廃藩後の明治十二年（一八七九）この神社を「新城神」と合祀して今日に至っている。

なお、宝物として内藤家寄進の甲冑、その他の文化財があったがそれらは現在、高遠町歴史博物館に保管されている

このマウンドは太鼓櫓に沿った土塁/右手前方が太鼓櫓

これが太鼓櫓/この背後の直下に笹曲輪があるようだ

太鼓櫓（たいこやぐら）

江戸時代には、時を報じるのに太鼓を打っていた。鼓楼（ろうじょう）は搦手門（からめてもん）の傍（かたわら）にあって、楼上に三鼓を備え、常に番人をおいていて、時刻がくると、予備の刻み打ちを繰り返した後、時の数だけ太鼓を打って、時を知らせていた。

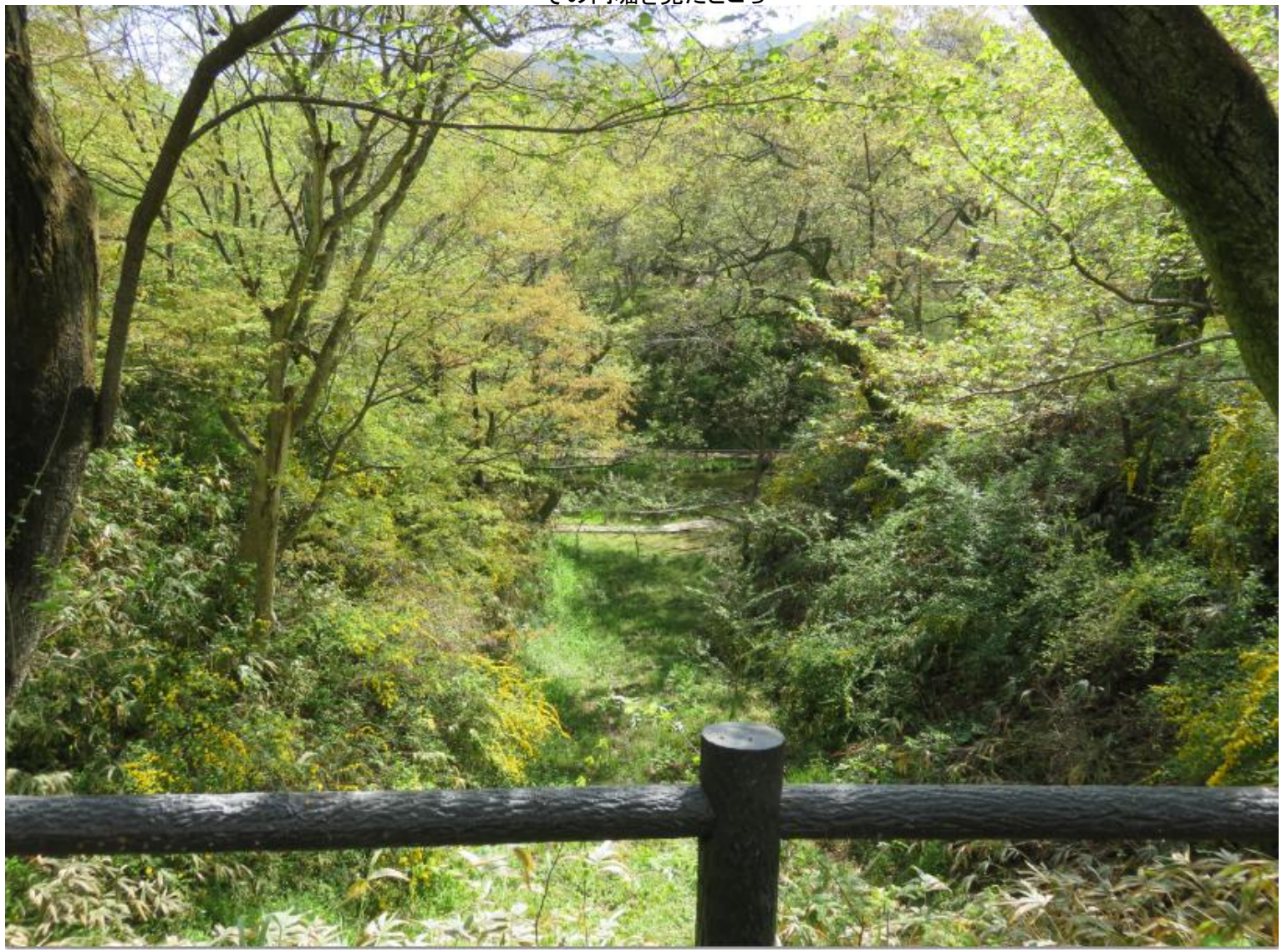
廃城の際、有志によって対岸の白山（はくさん）に鼓楼が新設されて時を報じていたが、明治十年（一八七七）頃に本丸、西南隅の現在地に移し、旧制どおり朝六時から夕六時まで偶数時を打つことが昭和十八年（一九四三）まで続いた。

戦後、太鼓は三ノ丸にあった高遠高等学校で、授業の開始、終了を知らせていたが、現在は、高遠町歴史博物館に展示されている。

本丸から高遠町方向を見たところ/ここは諏訪盆地と伊那谷を結ぶ杖突街道に面する交通の要衝であり、伊那市街地までを一望できる高台にあることから、軍事上重要な場所に造られた城である/この直下に現在は駐車場になっている勘助曲輪があるようだ

さて、ここは本丸と南曲輪との間にある内堀の土橋

その内堀を見たところ



前方が南曲輪のエリア

南曲輪（みなみぐるわ）

本丸の南に位置する曲輪で、名君保科正之（しなまさゆき）公が幼少の頃、母お静の方と居住したところと言われている。形状は方形をなし、本丸とは堀内道（ほりないみち）、二ノ丸とは土橋でつながっていた。

本丸から南曲輪へは現在土橋となっているが、これは本丸南東の隅にある巨大な中村元恒（もとつね）・元起（げんき）記念碑を建てるために造られたものである。また、明治三十年（一八九七）それまで雑草や小笹が生い茂った荒地であったが、靖国招魂碑（くにしょうこんひ）を建てるにあたり、地を削り広めて平地に整備したといわれている。

これは南曲輪と法幢院曲輪との間の外堀に架かる白兎橋

白兎橋（はくときょう）

文政（ぶんせい）の頃、高遠で酒造業を営み、藩の仕送役（しおくりやく）を勤める廣瀬（ひろせ）治郎左衛門（一七六八～一八四三）は、その号を白兎（はくと）と称し、謡曲・俳諧（はいかい）・和歌などを嗜（たしな）む風流人であった。文政の百姓一揆の際には、自家の米蔵を開放して奉行所に押寄せた百姓らに与え、大事に至らせずにすんだという。また、多町に通じる弁財天橋（べざいてんばし）を自費で修理するなど、公共のために尽力した。

その曾孫（ひまご）、省三郎（奇壁（きへき））は私有地となっていた法幢院曲輪（ほうどういんぐるわ）を買上げ、それを公園として寄付した。その時、南曲輪へ通じるこの橋を造り、曾祖父（そうそふ）の俳号にちなんで「白兎橋（はくときょう）」と名づけたのである。

ここが白兎橋を渡った所にある法幢院曲輪のエリア

法幢院曲輪（ほうどういんぐるわ）

二ノ丸から堀内道（ほりないみち）で通じていたこの曲輪は、城郭の南端に位置し、曲輪の東方には幅六メートル、長さ百七十メートルの馬場が続いていた。

かつて、ここには法幢院（ほうどういん）というお寺があり、高遠城落城の際には、法要が営まれたが、城中という立地的制約があったため、一般の人も参詣（さんけい）できるようにと、城の東、月蔵山（がつぞうさん）のふもとの龍ケ澤（りゅうがさわ）に移り桂泉院（けいせんいん）と改名して現在に至っている。

この曲輪からは、西に中央アルプス、東に南アルプスが望め、桜の時は残雪が紅葉のときは新雪が目にも清（さや）かに映る。

その法幢院曲輪にある「廣瀬奇壁　河東碧梧桐　句碑」

廣瀬奇壁

河東碧梧桐　句碑

この碑の表は、高遠出身の鉱山業者で、高遠閣建設に尽力されたことで知られている廣瀬省三郎（俳号奇壁）の句で、遠く東の方、仙丈ケ岳を眺めて読んだものである。

斑雪　高嶺　朝光　鶯　啼いて居

裏面は奇壁と交流があった河東碧梧桐の句で、西方、駒ヶ岳の残雪の雪形が、駒（馬）の姿に見えるようになった情景を詠っている。

西駒は斑雪てし尾を肌脱ぐ雲を

また題字の「嶽色江聲」は高遠出身の近代洋画界の奇才で、独特のスタイルをもつ書家でもあった中村不折の揮毫によるものである。

そこから見える高遠湖/高遠城跡は天竜川水系最大の支流である三峰川と藤澤川という2つの河川の合流点に形づくられた河岸段丘の上にある

さて、ここは本丸と二ノ丸との間にある内堀の堀底道

池となっている所もある/水堀のようになっていた場所もあったのであろうか

参考ホームページ

http://jyokakuzukan.la.coocan.jp/016nagano/027takatou/takatou.html

http://yogokun.my.coocan.jp/nagano/takatoomati.htm

http://www.hb.pei.jp/shiro/shinano/takatoh-jyo/

https://blog.goo.ne.jp/hanako1033/e/960597b6d6d7d01d8f7114f18a4c0a00

http://www.hat.hi-ho.ne.jp/moch/castle/castle_56.htm

https://www.inacity.jp/kankojoho/rekishi_bijutsu/bunka_kanko/bunkazai/takatojyoseki.html

岳
153
E19
飯田線
361
伊那市
E19
153
駒ヶ根市
152
高遠城址公園
桜や紅葉の名所
として知られる城跡
入笠山
E20
20
鋸岳
甲斐駒ヶ岳
Google